

抄録原稿

タイトル

「豪比結婚を考える一日比結婚との比較を含めて」
Filipino-Australian Intermarriages: Comparison with Filipino-Japanese
Intermarriages

佐竹 眞明 (名古屋学院大学)

Masaaki Satake (Nagoya Gakuin University)

キーワード 国際結婚、経緯・理由、支援、定年後

はじめに

国際的な移民を多数生んできたフィリピンから、結婚移民として女性が米国、日本、オーストラリアなどの国に移住してきた。2017年9月から2018年8月まで1年間、オーストラリアに留学した。そこでオーストラリア人男性と結婚したフィリピン女性との婚姻について社会的にインタビュー調査した。結果を報告する。日本のフィリピン女性と日本人男性との結婚に関する調査(佐竹 2017; 佐竹・ダアノイ 2006)との比較を入れる。

1. 研究の背景—過去の研究との関係

1980年代半ば 比豪結婚の増加に伴い、結婚の社会的意味合いを検討する研究が増えていった。結婚業者を通じて結婚する「メールオーダー花嫁」が問題視され、人身売買、インスタント結婚と批判された。他方、「メールオーダー花嫁」像への疑問も提示された。つまり、これらは一方的である、女性が家族をつくり、まっとうな生活をおくろうとしていることを無視している、という(Roces 2003:75)。本研究も否定的側面ではなく、女性・男性の現実を分析しようとしている。

2. 調査方法

2017年10月から18年3月にかけて、ニューサウスウェルズ(NSW)州内で、豪比カップル、未亡人に対して、調査を行った。インタビュー+質問表記入は7夫婦、妻4人、夫1人の計19人、質問表記入は3夫婦、妻2人、未亡人2人の計10人、総計29人である。

3. 3つの主要な質問・回答

①知り合った経緯と結婚の理由

紹介(12)が最も一般的である。友人(5)、親戚(4)、両者のいずれか(2)、職場の仲間(1)という具合である。在豪のフィリピン人が故郷の姉を紹介する場合、在豪のフィリピン人が在豪のフィリピン人を紹介する場合がある。他にオーストラリアの同じ職場で(4)、フェースブックで(2)、結婚業者を通じて知り合う(1)がある。日本の場合(佐竹 2017: 対象—日本男性9名、フィリピン女性17名)と比較する。妻の就労先9、姉の紹介4、友人の紹介1、自治体・業者の紹介1である。女性がエンターテイナーとして、働いていたことが経緯として、最多である。1980年代半ば~2005年にかけて、日本の入管政策が、その業種に偏って女性の入国を認めていたことが背景にある。

結婚の理由として、夫の半数は妻の人格、半数は妻の面倒見がよく、従順だからと述べた。Crespo 2009は「白人の夫にとって、結婚は成功だった。なぜなら伝統的な価値を持ち、家族と結婚に忠実な妻を見つけたから」という。妻の半数は人格・愛情ゆえ、残りの半数は金

銭的理由を挙げる。Crespo 2009 は「妻たちは婚姻の成功は豊かな生活を送れているか、による」と述べる。その点、合致する。日本と比較する。フィリピンとの経済的格差、結婚相手の半数以上が元勤務先の客という事情から、女性は相手が金持ちという、イメージを持って結婚しがちである（佐竹・ダアノイ 2006）。この点、共通する。

②結婚移住民に対する政府の支援

国の支援として、「多文化主義」政策時代（1972～1996）の移民情報センター（MRC）によるものがある。移民に対して、英語、住居、雇用の支援を行った。また、州、準州で実施される TAFE (Training and Further Education) と呼ばれる職業教育がある。フィリピンの場合、2010 年 K-12 と呼ばれる学制が始まるまで、中等教育まで 10 年しかなかったため、大学資格がオーストラリアで認められなかった。そのため、結婚移住者が TAFE を活用した。また、教育訓練省に成年英語プログラム、教育雇用のためのスキル学習、奨学金制度がある。これらを用い、キャリアアップした移民女性がいる。日本と比べると、日本語教育は自治体の国際交流協会によるものがある。厚生労働省も 15 府県で「外国人就労・定着支援研修」を行っている。だが、TAFE や教育文化省のような廉価な移民向け支援に欠ける。

③定年後のプラン

回答者のほとんどはオーストラリアに住むと答えた。理由は先ず社会福祉の高さがある。年金は十分である。診察・入院は無料で薬代は最小限の負担で済む。公共交通機関、ガス、電気、水道代も高齢者向けに割引が提供される。温帯性の気候（NSW 州）も耐えられる。さらに、オーストラリアは昇進の機会が保証され、生活も多文化社会的でなじみやすいという。フィリピンについては、夫婦で定年後過ごすには不向き、休暇などで一時帰りの地であるという意見が多かった。日本の場合、定年後は母国へ帰りたいたいと考えるフィリピン女性も少なくない（佐竹 2017）。理由は、日本は高齢者であっても医療費がかかる（30%自己負担）。フィリピン人が日本国籍を取得しておらず、現場労働に従事していることが多い。オーストラリアでは市民権を獲得し、専門職に就き、所属意識が強いことが挙げられる。

4. まとめ

比較によって、移民支援の充実、定年後の定着指向などオーストラリアの特質が明らかになった。また、移民支援など日本の改善すべき点が明らかになった。

文献

佐竹眞明、メアリアンジェリン・ダアノイ 2006. 『フィリピン・日本国際結婚—移住と多文化共生』、めこん.

佐竹眞明 2017. 「フィリピン・日本結婚夫婦にとっての支援とは」 佐竹眞明・金愛慶編 2017. 『国際結婚と多文化共生—多文化家族の支援にむけて』 明石書店所収、69-92.

Crespo M., 2009. *Online Marriage and “Buhay ko” (my life), Views from Filipino Prospective Brides, Wives and their U.S./British/Australian Husbands*, Ph. D. Dissertation, The University of New Mexico, 159.

Roces, M. 2003. “Sisterhood is Local; Filipino women in Mount Isa.” Nicole Piper and Mina Roces eds., *Wife or worker? Asian Women and Migration*, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, 73-100.